

ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における 同一性について

The Idea of Identity in *Essai sur les données immédiates de la conscience* by Bergson

祖父江 崇 (Takashi Sobue) 指導：加藤 茂生

本論はアンリ・ベルクソンの著書『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』）についてのものである。その中でも特に“同一性”に焦点を当てる。ベルクソンは“純粹持続”なる時間概念を提唱した。時間の真の姿である持続は音楽のメロディーのように絶え間なく動き続け、変化し続ける。しかし、一方でベルクソンは、持続を歪めてしまう要因についても言及している。それが空間と言語である。空間が介入すると、持続はたちまち分割され、区別され、並置されてしまう。言語もまた同様の影響を及ぼす。ベルクソンがこれら介在物を斥け、持続のあり様を明らかにしようと試みた書がこの『試論』である。こうした経緯から、研究者の間ではベルクソンの目的は持続の空間化を批判することにある、と解釈するのが通例である。しかし、我々の見立てでは、こうした空間化とは別種の作用が『試論』に伏在していることが確認できるのである。そこで中心的な役割を担っているのが“同一性”である。従って、本論では、空間と言語、両者の背後に潜む性質として“同一性”の存在を指摘し、この概念を軸に『試論』を改めて読み解くことを試みる。

第一章では本題に入る前の予備的考察を行う。まず前半部では、改めてベルクソンの持続論を素描し、その輪郭をはっきりさせる。そうすることで、持続と同一性との関係性もより掴みやすいものとなる。ここでは持続の二つの主要な性質、“異質性”と“有機的一体化”とが確認される。後半部で、我々はベルクソンの批判の矛先を見定める。ベルクソンは空間それ自体を斥けているようで、その実、空間によって喚起される錯覚を斥けていることが分かる。従って、同一性についても同様、それによって喚起される錯覚を批判しているということが言えるのである。

第二章から持続と同一性についての議論を開始する。まず、我々は“それ自身と常に同一的”というベルクソンの言葉を分析し、同一性が持続に対して“静止”という形で錯覚を喚起していることを突き止める。次いで、我々はこの同一性＝静止という考えを携えて、ベルクソンが挙げた空間化の具体的諸事例を改めて解釈し直す。いわば、それは空間化の背後で働く同一性の作用を見定める作業でもある。ベルクソンは、様々な事例を挙げているが、我々はその中でも重要度の高い物体の運動の事例に焦点を当てる。

一連の考察を通して明らかになるのは空間化に先行する形で同一性＝静止が持続に影響しているということである。

第三章では、言語に焦点を当てる。言語の場合も前章同様、空間化に還元しきれない錯覚のメカニズムが働いていることが確認できる。そして、そこでも同一性が中心的な役割を担っているのである。言語は、動きある対象に過去と同一の名前をつけることで、一つの纏まりをもった不動なるものへと固定化する。つまり、言語は同一性に基づき持続を過去化するのである。その際に損なわれるのは、持続の時制、“形成途上”なる持続の現在性である。一方で、言語には個物と個物の間に普遍性を見て取り同一の名前を付ける作用もある。ここには言語の相互同一性とでも称すべき性質が見え隠れする。しかし、それに対して持続は、一回一回が新しい特殊なものの連続から成る。従って、言語は同一性によって、持続の特殊性をも捨象するのである。

第四章では、持続が“同一でありながら変化する存在”である、というベルクソンの言葉を解釈する。前章までの同一性は、ひとえに“変化しない同一性”であったと言える。しかし、上記の言葉では、ベルクソンは持続に属する同一性、いわば“変化する同一性”の存在も認めているのである。我々の解釈では、この“変化する同一性”は、ベルクソン哲学における意識の自己同一性を意味するものであり、さらにはそれをもたらしめているのが有機的一体化の“反映”である。反映とは、一つの心理的狀態にその他全ての心理的狀態が現れている様を指す。溶け合い、反映し合う心理的狀態は同一律を保ち得ず、論理的な理解が不可能なあり様を呈している。

以上の議論を踏まえて、第四章後半では、“変化する同一性”と“変化しない同一性”とを比較し、その違いがベルクソン哲学にとって何を意味するのかを考察する。論理規則に従うか否かが二つの同一性を分かちのことであり、この違いは、持続を“説明する”か“感じる”かの違いに由来する。“変化する同一性”を擁する持続は、論理的に説明できず、直観によって感じる他ない存在としてある。一方、“変化しない同一性”は持続を知性的に認識し、説明しようとする際に混入する。最終的に、本研究が同一性という視角からベルクソン哲学に見出すのは、このような“存在する持続”と“知性による認識”との非対称的な二元論である。